

仏さまのはなし

響流

~ KOURU ~

発行所
茨城東組事務局
茨城県常陸太田市
久米町20-1
正念寺内



私の歩む道

佛照寺住職 鴨崎 和浩

私たちの生活の中にはかかせない暦こよみ、その中に彼岸という時期が毎年來ます。その彼岸という言葉は仏教用語の名になっていますが、元々は悩みや苦しみを乗り越えた理想的な心の世界の事。「かの岸(彼岸)」つまり、さとりごころの世界のことである極楽浄土ごくらくじょうどのことを指します。またその反対語として比岸しがんという言葉があります。比岸とは煩惱ぼんのうに振り回されながら悩み苦しんでいる心の世界「こちら側の岸」である迷いの世界をあらわしております。

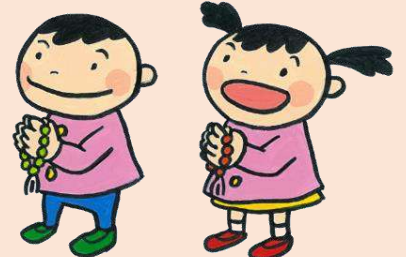
彼岸は、春分の日(春彼岸の中日)・秋分の日(秋彼岸の中日)で、その日は昼と夜の長さが等しく、バランスがとれた気候の時期になっています。そのようなバランスがとれたところを「中ちゆう」ちゆうといっています。そしてお釈迦さまは、両極端に



かたよらないバランスの良い生き方を「中道ちゆうどう」と呼ばれて、大切な生きる姿勢であるともいわれました。この中道ちゆうどうを歩む生き方とは、仏教の教えにかなった生き方の事をいいます。

浄土真宗ではさとりごころの世界に到るために修行するのではなく、日々のお念仏をおあじわいすることが重要です。彼岸の期間をさとりごころの世界、極楽浄土ごくらくじょうどに到らしめて下さる阿弥陀さまのお徳を讃えたた、そのおこころをいただく仏縁ぶつえんとすることが大切なのです。そして真実の世界であるお浄土に生まれた仏さまを偲しのびつつ、自分自身がお浄土へ到る道、向かわせていただく道をお念仏の教えからご縁をいただく期間でもあると思います。

彼岸は、先人の方々が日本の四季と風土を対比させ、仏道修行の期間・信仰生活を養う期間と定め、仏さまのはたらきを私たちに気づかせてくれる大切なご縁として、あじわわせていただきます。



合掌



お寺紹介

第5回



〒311-1534 銚田市鳥栖 1015



教圓寺は鳥栖山報恩院と号し、銚田市鳥栖の田園風景明媚な小高い丘の上にある浄土真宗本願寺派の寺院です。寺伝によると平安時代の初期、大同元年(806年)鳥栖観音寺と号し他宗に属していました。その後14代からのち、無住の期間を経て、文永4年(1267年)4月に鳥栖山報恩院教圓寺となり、現在の浄土真宗に属するようになりました。

創建者は当地領主であった村田形部小輔平高時、深く仏縁に厚く常に観音を信仰していたといえます。承久3年(1221年)その妻が難産のため他界、無量寺(現無量寿寺)の境内に葬られたが毎日夜になると、迷いの姿(幽霊)となって現れるので、村人たちも参詣をしなくなりました。無量寺は荒廃し無住となったそうです。

高時はじめ村人一同は迷魂の供養を行なおうとしていた時、親鸞聖人が鹿島参詣のおり、青柳を通られました。そこで、ことの仔細を申し上げて、お救いを願いあげたところ、聖人は喜んで無量寺にて読経されました。その結果、高時の妻の迷魂は往生することができたそうです。

その時、聖人の読まれた歌が

「弥陀たのむ 心をおこせ 皆人の
かわる姿を 見るにつけても」であり
ました。これは「変わりゆく人の姿を
見てその姿にとらわれるのではなく、
阿弥陀仏にお任せする心を起こしなさ
い」と、阿弥陀仏の智慧と慈悲のおこ
ころを私どもに勧めてくださいている
歌と味わえるのではないのでしょうか。

村人たちも、この時以来、親鸞聖人に
帰依して念仏を唱えたといえます。特
に自分の妻が成仏できた姿をみて高時
は喜び親鸞聖人の弟子となって、法名
を左膳と賜り観音寺に住持して妻の霊
を弔ったといわれています。その後、
寺号を教圓寺と改めて浄土真宗の寺燈
を守り現在まで絶えることなく続い
ています。



新築した本堂内

その後、平成8年頃から多くの門信徒並びに関係者のご支援ご協力により建設が始まりました。この本堂建設に当たっては、杉の伐採(500本以上)、土砂の造成など建築関係者の他、門信徒の皆様方の多大なるご奉仕などがありました。特に大工の棟梁などは青森県と茨城県を3ヶ月毎に往来し落慶法要が盛大に行われました。住職はじめ坊守や寺族、総代、世話人、門信徒など、寝食を忘れて本堂建設にご尽力いただいたそうです。

そして平成16年12月4日に落慶法要が盛大に開催されました。新築された教圓寺関係者の喜びはことばに表せないほどであったと思います。またこの春には門信徒の念願であった会館も新築され、恒例行事である「新年法要」「春の永代経」「盆法要」「秋の永代経」「報恩講」など、南無阿弥陀仏のおみのりを飲む合輪がますます広がることと思えます。

門徒推進委員 櫻村健一(釋信明)

合掌

はじめての仏事

第5回

作法のいろは

浄妙寺副住職 那須 信行



今回でお仏壇編は最終回です。皆様もお馴染みのお香についてあじわわせていただきましょう。

私たちは日常のお参りで手を合わせる前にお線香をお供えしたり、法事などの仏事でお焼香をしたりと様々な場面でお香に触れるご縁に恵まれます。仏教とお香は今では欠かせないものとなっていていますが、それは昔のインドでは誰かに会う時、相手に失礼がないように、お香のよい香りを身体につけていたことから始まったようです。同じように、仏さまにお参りする時も、仏さまを敬う思いからお香をお供えするようになったと言われています。

さて、お香は供香くこうとも言われ、香りをお供えすることをいいます。浄土真宗では、自らの煩惱によって悩み苦しむ私たちを阿弥陀さまがそのまま抱きとめて、大慈大悲のおこころで寄り添って下さっています。その阿弥陀さまのおこころとは、お供えされたお香の煙が心地よい香りをさせながら、部屋の隅々まで行き渡り私たちに届くように、私たち一人一人に平等にはたらかれているお姿とお聞かせいただけます。部屋の隅々まで至り届く香りは、誰か一人に届けるものではありません。その空間にいる人の良し悪し、年齢、性別などを分け隔てなく行き渡る阿弥陀さまのおこ

ころとして表されています。ですからお香は、阿弥陀さまのおこころや阿弥陀さまと同じはたらきをしている亡き人に対して、敬いのご恩報謝の気持ちからお供えます。浄土真宗本願寺派の焼香の作法で、お香を自らがいただく作法をしないのも、この気持ちの表れからです。お香には様々な種類がありますが、代表的なものが白檀びやくたん、沈香じんこう、伽羅きゃらです。最近では人工的に作られた安価なものが出回っていますが、仏さまを敬う姿勢が供香です。なるべく天然香でお供えしましょう。またご家庭の事情もあるかと思いますが、煙が全く出ないお香も控えたいものです。お仏壇にはぜひ天然香をお供えし、阿弥陀さまや亡き人のおこころを感じる中で報恩感謝のお気持ちでお参りいたしましょう。

全三回に渡りお仏壇を通して阿弥陀さまと灯明とうみょう、仏華、お香をあじわわせていただきました。日頃の仏事に関する問いを募集いたします。下記アドレスにメールしていただくか、発行所までお便りをお送り下さい。多くの方のお便りお待ちしております。合掌

お便りお待ちしております！

jiyouyouji.hitachinaka@gmail.com



お知らせ

中央教修のご案内

みなさんでともに浄土真宗を学んでみませんか？

中央教修に参加し、門徒推進委員として

悲しみや苦しみ喜びの人生を多くの方々と、ともに歩んで下さい。

中央教修とは全国の各地域で行われる連続研修会を修了した方を対象に、御本山西本願寺で行われる研修会の事です。3泊4日の日程で行われ、全国から参加される受講者、スタッフとも親しくなる事ができ、人生の視野が格段に広がります。仏法を聞き、法友との話し合いによってこれまで遠い世界の事と捉えていたみ教えが、いのちの大切さを説き、病気や死の恐怖を乗り越え、自分の生活が光り輝くものに変えてくれる尊い教えであったという体験がきっとできると思います。

法とともに朋とともに、これからの人生歩んでみませんか？

やり直す事の出来ない人生を、見直してみませんか？

連続研修会の御案内

いばらきどうそ

中央教修の前に、茨城東組での連続研修会を修了しなければなりません。

連続研修会は単に浄土真宗のみ教えを教わる事が目的ではありません。浄土真宗のみ教えが、あなた自身の生活にいきている必要不可欠なものであることを実感し、生きる意欲を引き出す研修会です。「家族を亡くした」「病にかかり」…独りで悩むのではなく、同じ悩みを抱えた方々と語り合い、お念仏に自身のいのちの問題を問い尋ねさせていただきませんか？

連続研修会は2年を1期とし、今期(第15期)も残りわずかとなりました。来年度からは第16期が始まります。募集はまだ先になりますが、ご興味のある方はぜひお寺までお問い合わせください。

図書案内



門徒もの知らずという言葉がございます。

歴史的な背景のある言葉ですが、一般的に門徒とは、浄土真宗を信仰している者の事を指し、他のご宗旨を信仰する者を檀家と言います。檀家さんには決まりごとが多く、お盆や彼岸、お年忌にもしなければならぬ事が沢山ございます。しかし、私どもは自らが功德をつむのではなく、阿弥陀さまの願いをただ聞かせていただくご宗旨。何かしなければならぬという決まりごとは殆どありません。門徒もの知らずという言葉は、何も知らない・知らない門徒を揶揄するような言葉と受け取られがちですが、そうではありません。私どもは阿弥陀仏にすべてお任せ。知る必要がないのでございます。

しかしながら…今更聞きづらい。こんな時はどうすればよいの？という事もあるでしょう。それに応えてくれる本。「門徒もの知り帳」1冊傍に置いてみてはいかがでしょうか。

1987.11 法蔵館 617円(税込み)

編集後記

お孫さんのお焼香に付き添う母。祖父母が背後で見守り、BGMは蝉の声。汗をかいたグラスの氷が「カラン」と響く。お盆の夏の景色を噛み締めつつ、あっと言う間に秋のお彼岸。時間の流れのはやさに驚かされつつ、推進委員さんと青年僧侶で作り上げた響流ご一読下さい。 清心寺 増田廣樹